日本医学教育学会の活動状況[*1]

牛　場　大　蔵[*2]

はじめに

日本医学教育学会（Japan Society for Medical Education）は1988年（昭和63年）に創立20周年を記念した．それに関する事業は後述の各項でふれることとして，前回の白書以降1986年から現在までの学会活動状況を項目別に記す．

1. 役員と委員会等

第8期（1985～87年）の詳細は前回白書に記したが，第9期（1988～90年）の役員，各種委員会の構成は下のようである．

役員：

会長：牛場大蔵，副会長：中川米造，鈴木淳一

監事：堀　原一，尾島昭次

運営委員：阿部正和，石田　清，岩崎　榮，岩渕　勉，植村研一，紀伊国献三，菊地　博，桜井　勇，館　正知，田中　勧，高久史麿，畑尾正彦，橋本信也，浜田　宏，林　茂，日野原重明，福間誠之，星野一正，吉田　修

幹事：加我君孝

役員の事業担当としては，庶務：中川，会計：鈴木，財務：阿部，教育機関連絡：西園，白書：畑尾，渉外：尾島，ワークショップ：中川をそれぞれ委嘱したが，途中「渉外」を「国際関係」に変更し，さらにこれは現在常置委員会となった．

常置委員会の名称，委員長および副委員長（カッコ内）は下のとおりである．

1）会則検討委員会：中川

2）編集委員会：鈴木（中川）

3）選抜検討委員会：橋本（桜井）

4）卒前教育委員会：尾島（田中）

5）医師国家試験検討委員会：堀（細田瑳一）

6）卒後教育委員会（大学院）：高久（溝口秀昭），（臨床）：福間（岩崎）

7）生涯教育委員会：岩渕（小林健一，菊地）

8）教育技法委員会：星野（林）

9）国際関係委員会：尾島

さらに当面のトピック的な問題に対する，ワーキング・グループとしては前期の3グループのうち，「医師国家試験」は上述のごとく常置委員会となり，「医学的一般教育」は終了した．現在の主任，副主任（カッコ内）は下のとおりである．

1）行動科学：中川（平山正実）

2）確信度を加味した客観試験：田中（尾島）

3）臨床能力評価：畑尾（橋本）

常置委員会，ワーキング・グループはそれぞれ年4～6回ほど委員会，あるいはワークショップなどを開催している．ただし会則検討委員会は必要時のみ開催し，編集委員会は年6回，運営委員会に引きつづき開かれた．

運営委員会は毎年2月，4月，6月，年次大会時，9月および12月の計6回開催され，その議事録は機関誌「医学教育」に掲載されている．

2. 会員の状況

1986～89年4年間の会員数の推移は下のとおりである．

個人会員：855—861—871—912

機関会員：101—103—101—107

賛助会員：15—14—14—14

---

*1 Activities of the Japan Society for Medical Education.

キーワーズ：日本医学教育学会，常置委員会，ワーキンググループ，年次大会，ワークショップ

*2 USHIBA, Daizo 慶應義塾大学名誉教授，日本医学教育学会会長

3. 年次大会

1986年の第18回大会は7月25日(金)，26日(土)の両日，島根医大科学において，檜　学大会長，森　忠三実行委員長の下に行われた．基調テーマとして“情報化時代の医学教育”が選ばれ，それに沿った特別講演“第5世代コンピュータと医学”が渕　一博氏によってなされた．他の特別講演は，“Clinical Decision Analysis”が米国イリノイ大学 A.S. Elstein 教授によってなされたが，同氏を中心として大会前にプレコングレス・セミナーが同所で開かれている．なお招待講演としては上海第二医科大学長，王　振義教授の“中国の医学教育”があり，その他生涯教育についてのパネル，6つの主題に関する討議が行われた．一般演題28題，有料参加者209名の盛会であった．

1987年の第19回大会は7月24日(金)，25(土)日の両日，所沢市防衛医科大学校において，菊池順一郎大会長，田中　勧実行委員長の下に行われた．基調テーマとして“医学教育における分化と総合”が選ばれ，特別講演は高間直道氏による“哲学の心”と“医の心”であった．パネルとしては医学教育の管理者，統合カリキュラム，および効果的な教育の3題が選ばれ，7つの主題による討議のほか，指定演題として“海外医学教育の特徴”が印度，西独，米国での体験者によって解説された．全参加者394名を数え，良好な評価が得られた．

1988年の第20回大会は7月26日(火)，27日(水)の両日，KKR 東京竹橋において，高久史麿大会長・実行委員長の下に行われたが，折しも学会創立20周年にあたり，その記念行事が同時に催された．大会の基調テーマは“医学教育・卒後研修改善の方向”で，特別講演は記念行事で招聘した Dr. B. Skupnjak（ユーゴスラビア）の“Medical Education on Primary Health Care in Yugoslavia”と，Dr. K.R. Cox（オーストラリア）の“Dilemmas Facing Medical Schools”が持たれた．

大会のパネルは6題が選ばれ，そのうち「国際交流」にはWHOからの参加があって活発であった．一般演題には医学生，看護関係，臨床検査技師からのものが含まれ，パネルと併せて91題を数え，有料参加者は200名を超えた．

20周年記念行事のうち，式典は大会第1日の午後3時より行われ，記念講演（牛場会長），来賓祝辞，招待講演（森　亘氏“医科大学の個性と外様性”，および Dr. J.S. Gonnella（米国）“医学教育の管理”があった．なお記念事業の一つとして「日本の医学教育―“改革へのあゆみ”1969～1988」が発行された．

1887年の第21回大会は7月21日(金)，22日(土)の両日，山形大学医学部において，坪川昭三大会長，塚本　長実行委員長の下に行われた．基調テーマは“期待される医師像”であり，特別講演は西園昌久教授による“医学教育改革の潮流-エジンバラ宣言と福岡宣言”であった．パネル2題，シンポジウム2題が組まれた他，実行委員会による学会活動の報告が卒前臨床教育評価と医師国家試験の事後評価についてなされたのは新しい試みであった．3つの主題と一般演題あわせて70題の応募があり，参加者には学生数の増加が目立った．はじめての東北地方における学会は，記録的暑熱の下にもかかわらず200名以上の参加者を得て盛会であった．

4. 各委員会・ワーキング・グループの活動

会則検討委員会に関連することとして，2つの重要事項が行われた．1つは第21回大会で承認された会費値上げの件で，1990年より個人会費8,000円（従来6,000円），機関会費80,000円（同60,000円）となった（学生会費，賛助会費は据置き）．他は事務所変更の件で，1989年9月よりその所在地は財団法人日本学会事務センター（東京都文京区弥生2-4-16，学会センタービル，Business Center for Academic Societies Japan）となった．ただし機関誌「医学教育」編集事務は従来通り，篠原出版株式会社で行われている．

編集委員会関係としては雑誌「医学教育」については本白書の別章で述べられるが，創立20周年記念事業実行委員会が編集委員会を中心として結成された（委員長 鈴木淳一）．前述（年次大会の項）の20周年記念誌は尾島昭次，畑尾正彦両委員担当の下に1989年7月に刊行された．なお財務担当（阿部正和，橋本信也両委員）により記念事業のための募金が行われ，式典当日の記念品作成は田中　勧委員担当であった．

20周年記念論文募集も記念事業の一つとして行われ，編集委員会が選考にあたった．その結果，三谷一裕氏“多選択肢問題に勝る客観試験方法「type mZn」について”，および小泉俊三氏“卒後臨床教育における「評価」の客観化をめぐって一価値基準の多様性の医療におけるテクノロジーアセスメント”の2題が佳作入選し，ともに「医学教育」20巻3号に発表された．

選抜検討委員会では学会第9期（1988年）から委員長が織畑委員から橋本委員に交替したが，「入学者選抜に関する討議会」は引きつづき開催された．すなわち第8期の1986年9月には第5回（参加41大学，62名），1987年9月には第6回（参加40大学，68名），第9期の1988年9月には第7回（参加55大学，82名），1989年9月には第8回（参加53大学，81名）の討議会が持たれ，それぞれ熱心な討議がなされた．本委員会では現在1989年度新入学生を対象とした医学志望についてのアンケート調査を国立大10校，公立大3校，私立大7校に対して実施依頼中である．

卒前医学教育委員会は学会第8期の「学部教育委員会」の名称が第9期より変更されたもので，委員長は同じく尾島委員長であるが，副委員長が植村委員から田中委員に変更された．第8期の後半より続けられた卒前教育におけるプライマリ・ケア・コースのカリキュラム試案は，浜松におけるワークショップなどの討議を経て，「医学教育」18巻1号（1987）に公表された．その後，本試案の具体的実施要項の検討および改訂される医師国家試験ガイドラインについての卒前教育との関係の検討が京都における小委員会（担当平野　寛委員）等によって続けられている．

学会第8期の「医師国家試験ワーキング・グループ」（高久主任）は第9期より「医師国家試験検討委員会」（堀委員長）となり，国試に関する研究が続けられている．合格水準の検討については第7期の学部教育委員会で行われたものを継続し，その成果を“医師国家試験の事後評価”として発表した（「医学教育」19巻1号．1988）．その後事後評価を続けるとともに，1993年に予定されている国試出題基準（ガイドライン）の改訂に向けて，学会としての改善案を練るための討議を重ねている．

卒後教育に関する委員会は学会第8期まで，「卒後臨床教育委員会」であったが，第9期より「卒後教育委員会」とし，大学院関係（高久委員長）と臨床関係（福間委員長）の2本建てとなった．第8期で作成された“期待される医師のマナー：実践をめざして”は1988年7月に刊行されたが，その後臨床関係では卒業臨床研修目標について引き続き検討を重ねた．その結果，一部アンケート調査を含む多くの討議を経て，“卒後臨床研修目標改正案”を公表した（「医学教育」21巻1号，1990）．

なおその間，厚生省医療関係者審議会臨床研修部会より提出された研修目標案および日本医師会の“臨床研修懇談会中間報告”が参考とされた．さらに研修評価については，主にそのチェックリストの作成を後述の「臨床能力評価ワーキング・グループ」との共同で進めている．大学院関係では，とくに臨床系大学院のあり方の討議が続けられ，その結果を“臨床系大学院に関する提言”として公表した（「医学教育」21巻1号，1990）．

生涯教育委員会は学会第8期の鳥居・畑尾両委員長から第9期の岩渕委員長に引きつがれた．1988年には“医師の生涯教育の目標”を提言し（「医学教育」19巻3号），その後，大学および臨床研修病院に対するアンケート調査研究を行った．大学の調査は1984年に一度行ったものの第2回目であり，1989年7月現在80校中73校から回答の結果，前回に比して生涯教育に関する意識にかなりの変化がみられた．臨床研修病院への調査は今回がはじめてのものであり，213の指定病院中159病院から回答があった（1989年6月現在）．いずれも内容を整理し，「医学教育」へ発表の予定である．

教育技法委員会は学会第8期の林委員長から第9期の星野委員長へ引きつがれた．委員会が編集した「医学教育」の連載教育媒体シリーズは16巻1号（1985）から19巻4号（1988）の21回で終了したが，それを元として新しく，“医学教育技法マニュアル”を編集するべく討議が重ねられている（1990年刊行予定）．

1989年1月に従来の事業担当「渉外」から変わって結成された「国際関係委員会」は，引き続き中国医科大学との関係，ユーゴスラビアとのプロ

ジェクトなどを討議している．また“国際化時代における医学教育”をテーマにして，その現状と問題点について「医学教育」への載連特集を企画している．

3つのワーキング・グループについて，継続の「行動科学」は“態度学習”について「医学教育」18巻3号（1987）に特集を編集した．学会第9期には委員の一部交替後，態度学習マニュアルの編集および“倫理教育”の特集執筆を討議，計画している．

「医学的一般教育」ワーキング・グループは，学会第8期に一つの成案を得て発展的解消を遂げ，第9期には「確信度を加味した客観試験」ワーキング・グループが，同じく田中主任の下に結成された．そこでは米国で開発されたテストの検討，とくに従来法との比較が追究されている．

学会第9期で新しく結成された「臨床能力評価」のワーキング・グループは，まず卒前臨床実習の評価表作成をワークショップなどによって検討した．その成果は第21回大会において発表され，各大学に送付して意見が徴された．その報告書は総括評価（自己評価票と指導医評価表），臨床実習の目標，臨床モデル，評価の時期・方法，および評価の手引きからなっている．

同時に各大学に対する臨床実習評価の実態調査がパイロット・アンケートによって行われた（一部「卒前医学教育委員会」との合同）．さらにその後，「卒後教育委員会」の臨床関係との共同の下に，卒後臨床教育評価チェックリストの作成をワークショップによる討議などで進めている．

5．学会の協力事業

学会全体としては1974年以来毎年行われている全国的の“医学教育のためのワークショップ”（於富士教育研修所，厚生・文部両省主催，本学会および医学教育振興財団協力）に，講師派遣その他で協力を続けている．第13回以降の開催状況はつぎのごとくである．

第13回（1986年12月7日～12日）
第14回（1987年12月6日～11日）
第15回（1988年12月4日～9日）
第16回（1989年12月3日～8日）

以上4回いずれも参加者は大学20名，研修病院20名の計40名，主題テーマは“カリキュラム・プランニング”であったが，第16回の時はとくに創造性，自発性，倫理，高齢者医療，末期医療などの課題に対する教育技法が強調され，それに関連した討議とプロダクトが多かった．

*　　*　　*